２０１９年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会
ＦＣ岐阜賞

put yourself in someone's shoes

岐阜市立精華中学校３年　炭竈　心音

八十五才の私の祖母は、高齢ではあるが、食事の準備や洗濯、掃除も自分ですることができ、元気な毎日を送っている。友人も多く、毎日のように出かけているようだ。そんな祖母だが、唯一、大好きだった温泉には行かなくなった。三年前の夏から・・・。

祖母は三年前、定期検査で肝臓にガンが見つかり、手術を受けることになった。高齢での手術に周囲は心配したが、年齢の割に全身状態が良く、何より本人が「治してもっと長生きするわ」と前向きな姿勢であったので、手術に踏み切った。幸い転移もなく、手術後は元気を取り戻し、日常に戻った。

しかし祖母のおなかには、大きな手術あとが残った。胃の辺りから右の腰骨にかけて、大きな大きな傷あとである。「名誉の負傷よ」と祖母は笑いとばすが、確かに私も初めて見たときは、事情を知っているにも関わらず、傷あとを凝視してしまった。それから祖母は、

「私はいいんだけど、一緒にお風呂に入る人たちが気分悪くなるでしょ。」

と言い、温泉には行かなくなった。本当に、周囲はそんな気分になるだろうか。私は肉親であるから、祖母の手術あとにびっくりはしても、不快にはならなかった。旅行先の温泉で、偶然隣になった女性にもし、大きな傷あとがあったら、私はどんな気持ちになるだろうか。

手術や事故で、「見た目」が変わってしまった人たちの他に、生まれつき「見た目」が違う人たちもいる。私は、以前「ワンダー」という本を読み、「トリーチャー・コリンズ症候群」という病気を知った。顔の骨の不形成や耳の奇形が症状に現れ、初めて顔を見た人は必ず驚き、恐れさえ抱く。他にも、顔に大きなあざがある人、生まれつき無毛症の人、アルビノといって、体毛や皮膚が真っ白な人がいる。今それらは、「見た目問題」と称される。「見た目問題」を抱える人たちは、街を歩く時、ジロジロ見られ、コソコソ話をされ、辛い思いをされてきている。そういった問題を抱えている人が、全国に百万人もいるといわれているのに、周囲はあまり存在に気づいていない。なるべく目立たないように、目立たないようにと生活されているのだろう。きっと、我慢を強いられる生活なのだろう。

日本の社会はいつも、多数派か少数派か、普通か特別かのどちらか二択の選択を迫られる。そして、多数派が正解と決められる。様々な意見、様々な見た目、様々な生き方を、今の日本は許していない。

見た目が少し変わっている人を見て、一瞬驚くのは、仕方のないことなのかもしれない。大切なのは、それからどのように行動するかなのだろう。遠巻きにジロジロ眺めるだけの人間になるか、「こんにちは」とこちらから明るくあいさつできる人間になるか。言うのはたやすいが、なかなか難しい。

英語に「put yourself in someone's shoes」という表現がある。「相手の立場に立ってみる」という意味だ。しかし、相手の靴をはくには、先に自分の靴を脱がねばならない。サイズも好みも違う靴をはく。だから、こちらから相手に合わせていく必要がある。「相手の立場に立って考えなさい」とよく言われるが、それは簡単なことではない。自分から積極的に「少数派」と会話し、個人や周囲の環境を理解するまで相手に寄り添って、初めて「相手の立場」に立てるのだ。

新しい時代「令和」が幕を開けた。今後、私の身近にＬＧＢＴを公表する友達がいるかもしれない。また、私は将来、外国人労働者の方と働くことになるかもしれない。見た目が違う少数派が遠慮する社会は、もうやめよう。そして、祖母にも堂々と温泉に行ってほしい。

誰もが暮らしやすい社会のために、若い私たちが視野を広げ、正しい知識を持ち、想像力を働かせて、個性を認め合える新時代を創っていきたい。令和を創るのは、私たちだ。